

R3 島根県高校駅伝結果

2年連続の男女アベック出場達成！

～全国非強豪校（公立高校普通科）の星になれるのか～

10月30日（土）明け方は今シーズンでも最も低い7℃、徐々に気温は上昇し、10時には快晴で18℃、ほぼ無風のコンディション、浜山公園補助競技場発着点とし、神戸川土手沿いを走るコースで男子第72回、女子第36回島根県高等学校駅伝競走大会が行われた。ロード部分は2年前まで行われていたコースと同じだが、本競技場改修で補助競技場が発着点となったため2年前までの開催よりはスタート後のアップダウンが若干あり、わずかではあるが時計がかかるコースであった。昨年に続き今年も新型コロナウイルス感染症の影響のため1年の中で最も重要視している9月の雲南ナイター記録会が中止、さらに10月初旬の日本海駅伝・倉吉女子駅伝、鬼太郎カップも昨年に続き中止となり、我が校の参加選手にも本来の力ほどの公認の記録がないままの出場となった選手もいた。無観客開催に協力していただき無事大会が開催できたことを地域、関係者の皆様に感謝したい。

女子チームはライバル校に一度も先頭を許すことなく11年連続13回目の優勝を果たした。昨年初優勝の男子チームもライバル校に3分半以上の大差をつけて連覇し、2年連続の男女チーム全国駅伝出場を決めた。

いずれも11月21日（日）に岡山県井原市の井原運動公園陸上競技場で行われる男子第63回、女子35回中国高校駅伝競走大会に出場する。そして12月26日（日）に、たけびしスタジアム京都（西京極陸上競技場）で行われる冬のインターハイ、男子72回、女子第33回全国高校駅伝競走大会にアベックで出場する。（敬称略）

写真提供（アタゴ写真館・平田高校）

女子逃げ切りで11年連続13回目の優勝

○女子（松原、来間、角、田邊、森山）のレースの様子と結果

昨年は新型コロナウイルス感染症対策関連でライバル校の外国人留学生たちの日本への再入国が秋になった。日本の蒸し暑い時期を母国で過ごし、直前に高地トレーニングから帰ってきてすぐの大会参加みたいなものだった。予想を上回る力をつけていた（実際彼女たちは今春卒業して大学、実業団のトップ大会でトップのゴール）ので2分くらい前に位置し、先頭が見えない形のレースのプランを想定しそれぞれが他の4人のためにタイムを削り、どうにか1分強の差で逃げ切ることができた。

本校に新年度、一昨年の全国中学駅伝経験者を含め4名が入部し順調に力をつけてきた。1年生の本田は10月16日の益田市陸協記録会で中学の3000mのベストをなんと1分15秒も縮め10分10秒台をマークした。6月の中国高校陸上（インターハイ中国ブロック予選）へは女子部員全員が勝ち進み、森山は1年生ながらインターハイの切符を手にした。上級生たちも負けまいと頑張り、田邊、来間、松原が中国大会8位以内に入賞し、3年松原はインターハイ出場。また中止にはなったが三重国体にも来間、森山が代表選出された。

一方、ライバル校は今年も新しい留学生が4月に入学して高体連にも登録されたいらしい。そして1年生に3名、地元の石見部だけでなく出雲部からも有力な選手たちが入部した。相手校のエースが完全復活したら、両校の力はほぼ互角で勝てるかどうかかわからないというスタッフ陣の不安の中で新学期が始まり過ぎていった。

大会直前に外国人留学生がエントリーされていないといううわさが入ってから気の緩みがあった。今大会を走った5人の選手のうち、中長距離のレベルが高い中国5県のブロック大会で5人のうち4人が入賞したチームであったとしても「留学生がいたら負けていたかもしれない」レース展開だった。

1区は今年福井インターハイに出場し、昨年は中国高校駅伝1区で区間賞、全国駅伝5区でも区間15位の松原のどか。受験関係の時期を迎えたこと、インターハイ後に足を痛めたこともあり調子が上がってこなかった。ライバル校は故障から復活した3年生エース、しかし大会や記録会が少なくどこまで強さが戻ってきたのか不明のままだった。2年前にラストで2分ちぎった相手とはいえ、前半を慎重に進めて最後でリードを広げればというイメージでスタートを切った。あと30秒程度速ければ理想的だったがライバル校に29秒の差をつけて2区の来間につないだ。





入学以来多久和コーチが「潜在能力はチームでトップ、眠れる獅子」と称した、スピードと持久力を併せ持つ来間美月は昨年が続いて2区。今年になって眠れる獅子が徐々に目覚めはじめた。今年は1500mで大きく自己ベストを更新し中国総体決勝進出もゴール前であとわずかの差で逆転され7位でインターハイ出場は逃したものの、1年次に続き2度目の国体代表に選出された。また昨年の全国駅伝も

急坂からの入りとなる2区4キロを区間23位と県内トップの実力がある。目標タイムは13分台だったが14分11秒、30秒広げたが第2中継所でのライバル校とのトータル差は想定より1分遅いわずか59秒差のリードだった。

3区は昨年引き続きアップダウンに強い角桃子。昨年も1年ながら力強い走りでも全国大会3区23位など様々な区間の起用に応えた。陸上競技関係のある全国雑誌の特集で昨年の全国高校駅伝に出場したチームで持ちタイム以上のパフォーマンスを出せた学校最上位に我が校は男女とも位置しているのだが、その典型が角だ。県駅伝のプログラムのエントリーリストについてだが、我が校では大会エントリーは3000mの公認記録の速い順に載せることが多いのだが角の今年の公認の持ちタイムはエントリー枠8名のうち8番目の10分19秒でしかない。しかし角は馬力が必要なロードでは一番パフォーマンス度が高いのは皆が知る。時計がかかる3区3キロ区間でトラック



の公認ベストより圧倒的に速い10分7秒で走りきった。3年前に時計が同じコースで各県代表以外に5県ブロック最上位校が全国に出場できたハイレベルな記念大会の区間の記録と比較しても世羅、興譲館、倉敷といった学校とほぼ遜色ない記録である。角はライバル校の実力ある1年生と25秒の差をつけトータル1分24秒差とした。

4区については部員数が少ない平田高校にはよくあることだが、大会直前メンバーが3名故障で大変なことになりそうであった。オーダー提出当日の朝練習で田邊心がどうにか走れるということで起用となった。田邊は6月の中国高校陸上800mでインターハイまであと一

歩の8位、県高校新人800m優勝、3週前に松江で行われた中国高校新人でも6位入賞とけががなければどうにかなるはずだった。しかし相手はこちらが最も恐れる1年生で、今年徐々に記録を伸ばしてきた。2019年益田-浜田間駅伝（しおかぜ駅伝）では1区で社会人、大学生、高校生ランナーなど38人の中で中学生としては本校1年の門脇花音に次いで活躍した選手でもある。タスキをもらってすぐ土手の急坂、橋の登りから始まる区間では足に痛みがある田邊にはきついコースだった。徐々に差が詰められていくが粘りの走りで、17秒詰められたものの1分7秒のリードで5区アンカーの森山へタスキを繋いだ。全国大会の4区はスタート直後をちょっと上ったらあとはひたすら下っていくスピード区間である。田邊を含め今回控えにまわった選手たちの誰が下りのスペシャリストとして活躍するか今後のチーム内での競争が楽しみではある。

5区アンカーは1年生ながらこの夏インターハイに出場し国体代表にも選出された森山紗仁美、3000mの中学時代のベストを10月に行われた益田市陸協記録会で26秒更新し、10分4秒台まであげてきた。人生初の女子駅伝5区で経験不足の不安はあったであろうがスピードがあり、フォームは長い距離向きで精神力も強いことから抜擢された。相手はベストが10分半の3年生だったが、今までとは違う走りで17分54秒と健闘した。森山は2秒リードで区間賞、そして1分9秒差でゴールのテープを切った。



総合ベスト3 **優勝 平田 1:13.58**
2位 益田東 1:15:07
3位 松江農林 1:39.31

区間優勝者

第1区6km	松原のどか(3)	21:05
第2区4.0975km	来間 美月(3)	14:11
第3区3km	角 桃子(2)	10:07
第4区3km	(益田東)	10:26
2位	田邊 心(2)	10:43
第5区5km	森山紗仁美(1)	17:52

平高男子中盤の逆転で2年連続優勝！

○男子（志食、佐々木、尾林、田原、福島、加藤、布野）のレースの様子と結果

昨年、世間は常勝軍団のライバル校の優勝を確信していた。本校男子メンバーは3年生がわずか1人の若いチームだったが、ついに念願の初優勝をかざった。今年は昨年のメンバーが6人残っており、チームの5000m平均持ちタイムもライバル校より10数秒速い。故障やアクシデントがあるので、駅伝は走って見なければわからない。だが、絶対に今年は負けるわけにはいかなかった。しかし相手校も本校も故障者が出てしまい区間配置の大きな変更をせざるを得なくなった。



国体代表に選出された1区の志食は今年自己ベストを14分50秒に更新したが昨年に続き、記録会参加の機会が少なく、実際は14分半を切る力はある。何よりも10キロを安定して走ることができる粘り強さとガッツがある。島根のスーパーエース、14分10秒台の持ちタイムの格上ライバル校の1区選手について行き、最後にスパートされても粘り30秒差程度でつなげることができれば早ければ3区、遅くとも4区では追いつき、逆転できると読んでいた。レースはスローで進み相手校のエースが前に出たのだが、志食はその差はわずか12秒で第1中継所へ飛び込んだ。

2区は昨年5区を走った佐々木一哲。今季は3000m障害が中心で中国高校総体では尾林とともに決勝進出し、来年はインターハイ出場を狙っている。第1中継所でのタイムは想定内のタスキリレーだったが、「前半押さえすぎてしまった。」と本人の反省の弁。中学時代は相手選手がタイムでは格上だったが、今は違う。8分53秒で区間賞、タイム差は8秒まで縮めて第2中継所へ。



3区尾林は中国高校陸上3000m障害で3位、7月の雲南ナイター記録会では実業団や大学生相手に8分18秒台のトップでゴールし、県高校新記録をマークし、全国高校総体のぞんだ。8位以内入賞を期待していたが、予選で障害につまり失速、さらに水壕では日本選手権優勝の三浦選手以上の大転倒で予選落ちした。しかし島根の高校ではトップのスピード選手である。ここで追いつきたいところだったが相手校の選手も、実力者でずっと背中を追う展開が続きやや広がった14秒差で4区田原へ。



4区田原はレース数も少なく昨年の自己ベストを更新できていないが、10月の中国新人では他県の1、2年エースを相手に準優勝で自信も深まってきた。「区間新を狙っていた。1分以内なら逆転でチームを救えると思った。」追いつくとさらに力強いピッチで差を広げ区間新まで惜しくもあと8秒、1分52秒の差をつけて、5区福島へつないだ。





5区は高校駅伝2回目の福島康太、故障した中学の後輩佐野にかわっての起用。昨年までケガが多くエントリーメンバーから外れることもあったが、今年は3000m障害で中国大会に出場、安定して走ることができるようになってきた。この区間でもライバル校に18秒の貯金を増やし、2分10秒差のセーフティーリードで第5中継所へ。

6区は同じく駅伝2回目の2年加藤蒼梧、中学時代は県中学総体で田原に次いで2位の選手。入学後着実に力をつけてきた。今年は県総体5000mで3年生に混じり4位入賞で中国高校陸上へ出場した。中国大会の壁は厚かったが高いレベル強豪選手に混じり経験を積んだ。相手校は3年生で力はあるが着実な走りを披露し参加選手では唯一の15分台で走りきり2分31秒差の絶対的リードで最終第6中継所へ駆け込んだ。



7区アンカーは1年の春の前十字靭帯損傷から復活し昨年6区を区間賞で走ったキャプテンの布野雅也。最終区は最後の最後に浜山公園への急な上り坂が待ち構えるタフな区間である。しかし急勾配などものともせず一気に駆け上がる。そして補助競技場に待ち構える部員たちに最後は連覇のあかし、指を2本立ててゴールに飛び込んだ。6区に同じく唯一15分台の区間賞で、トータルタイムは目標としていた2時間10分29秒には届かなかったものの、2時間11分39秒だった。全国では平田高校最高記録を大きく更新する2時間7分台を期待したい。



7区アンカーは1年の春の前十字靭帯損傷から復活し昨年6区を区間賞で走ったキャプテンの布野雅也。最終区は最後の最後に浜山公園への急な上り坂が待ち構えるタフな区間である。しかし急勾配などものともせず一気に駆け上がる。そして補助競技場に待ち構える部員たちに最後は連覇のあかし、指を2本立ててゴールに飛び込んだ。6区に同じく唯一15分台の区間賞で、トータルタイムは目標としていた2時間10分29秒には届かなかったものの、2時間11分39秒だった。全国では平田高校最高記録を大きく更新する2時間7分台を期待したい。



総合ベスト3

優勝	平田	2:11.39
2位	出雲工業	2:15.11
3位	開星	2:19.40

区間優勝者

第1区10km	(出雲工業)	31:09
2位	志食 隆希(2)	31:21
第2区3km	佐々木一哲(2)	8:53
第3区8.1075km	(出雲工業)	25:37
2位	尾林 恒星(3)	25:43
第4区8.0875km	田原 匠真(2)	24:53
第5区3km	福島 康太(3)	9:12
第6区5km	加藤 蒼梧(2)	15:51
第7区5km	布野 雅也(3)	15:46

保護者、地域、卒業生の皆様へ

たくさんの皆様に応援いただきありがとうございました。昨年ついに常勝校を破り悲願の全国大会出場を果たした男子選手たちが連覇し、2年連続男女アベック出場がかないました。昨年の経験者も多く日々力がついてきたと実感します。12月26日に京都のたけびしスタジアム京都（西京極陸上競技場）で行われます全国大会にご期待下さい。年々タイムも向上し強いチームになったと周囲からもよく言われます。女子は本校が持つ島根県高校記録1時間11分43秒、昨年の本校歴代最高順位25位を上回る順位を目指します。男子も2時間8分を切り20位台を目指して調整して参ります。皆様には今までと変わらぬご声援、ご助力をお願いいたします。本当にありがとうございました。

スタッフ一同



明日も笑顔で頑張ろう！！